2013 年度　上智大学大学院　博士前期課程学位論文
B1266616　イムナヘ

FDI がアフリカの発展に及ぼす影響の再検討
ーモザンビークのモザール・プロジェクトの事例からー
Re-examination of FDI in Africa
- Case Study of Mozal Project in Mozambique

要約

近年、アフリカは多国籍企業にとって新たな経済活動の場として注目を浴びており、アフリカの国々は FDI（海外直接投資）などの外国資本を誘致し経済成長を実現させるため、企業に親和的な環境作りに力を入れている。特に最近はメガ・プロジェクトと呼ばれる 10 億 US ドル以上の大規模の投資が増えてきた。FDI に対しては、資本蓄積、技術移転、雇用創出などの肯定的な効果があるという評価がある一方、工業移転等による資本逃避の容易さ、生産利益の海外流出、技術のスピルオーバーの難しさ、雇用創出等のトリックルダウン効果の低さ、国内産業を潰し地域発展につながらない点などの否定的な評価もなされている。本研究では、サブサハラアフリカで最も成功に経済成長を遂げていると言われているモザンビークの例をあげて FDI の貧困削減効果を検証する。

モザンビークは海外資本を効果的に利用して発展している国だと評価されている。モザンビークは本来一次産業を中心とする農業国家であるが、1990 年代から多くの FDI を受け入れ始めた。その大きな割合を占めるのは工業部門の FDI であり、アルミニウム生産工場であるモザール社は代表的なケースである。モザール社は 2001 年から着実にアルミニウムを生産・輸出している会社で、モザール II に拡大した 2004 年からの年間生産量は平均 552,000 トンであり、モザンビークの GDP 増加にプラスな影響をしている。しかし、このような目に見える成長にも関わらず、モザンビークは今も高い貧困率で苦しんでいる。GDP が増加し続けた 90 年代から 2000 年代の間、貧困層の人口はむしろ増えており、2013 年の HDI（人間開発指数）は 187 カ国の中 185 番目で長年最下位の水準から脱していない。

経済は成長しているのに国民の生活レベルはなぜ上がっていないのだろうか。本稿では経済に与えるインパクトが甚大であり、モザンビークの経済成長の原動力だと言われているモザール・プロジェクトを取り上げ、この矛盾を分析している。モザール社は経済的には美しい成功例とされているが、アルミニウムの原料であるボーキサイトがないところに建てられた点、全人口の 0.05%にも満たない程度の小さい雇用創出、税金をきちんと払っていない点など、人々の生活に与える社会的な影響力は非常に少ない。このようなことからモザール社は、モザンビークの社会にその経済的インパクトの規模に見合うレベルの還元はしていないと考えられる。

モザンビークにおける経済成長と国民生活との乖離現状は、単にモザンビークのみの問題ではない。アフリカへの FDI はこれからも益々増えると予想されており、モザール社で見られる諸問題はアフリカ全体においても十分起こりうる。アフリカの経済発展のためには FDI が最善策であるという考え方から脱し、アフリカの人々の真の発展のためには何が必要なのかをもう一度考えるべきである。